小 学 校　特 別 支 援 教 育　部 会

部会長名　川崎町立川崎東小学校　校長　上原　誠司
実践者名　添田町立真木小学校　　教諭　川原　陽子

1　研究主題

自分の思いを表現できる児童を育てる支援の在り方
～自立活動の時間におけるＡ児への指導の実践を通して～

2　主題設定の理由

（１）社会の要請から

新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議の報告（Ｒ３年１月）によると、障害のある子どもの自立と社会参加を見据え、子ども一人一人の教育的ニーズに最も的確に応える指導を提供できるように、連続性のある多様な学びの場の一層の充実・整備を着実に進めていくことが取りまとめられた。また、障害のある子供の教育支援の手引（Ｒ３文部科学省）によると、教育的ニーズとは、子供一人一人の障害の状態や特性及び心身の発達の段階等を把握して、具体的にどのような特別な指導内容や教育上の合理的配慮を含む支援の内容が必要とされるかということを検討することで整理されると記されている。

障害の有無に関わらず誰もがその能力を発揮し、共生社会の一員として共に認め合い、支え合い、誇りをもって生きていくための基礎として、自分の思いを表現してコミュニケーションを円滑に行うことが大切であると考える。そして、そのためには、どのような支援の在り方が大切かを検討していくことが必要である。

（２）Ａ児の実態から

Ａ児は３年生で、就学前に自閉症スペクトラム・ＡＤＨＤの診断を受けている。算数が得意で数の概念などの理解が速い。また自分の興味のある言葉を辞書で調べて漢字で書いたり、生活体験の中から結び付けて覚えたりすることが得意である。一方で自分にとって興味・関心が薄いことや、繰り返しの学習に取り組むことが難しく、強く拒否したりその空間にいることさえ難しかったりする。人と関わることは基本的に好きで、周りにいる友だちと自分の興味のあることを話したり、他学年の児童のそばに行って手を振ったりするなどのコミュニケーションを楽しむ姿がみられる。一方で、自分の気持ちを整理して言葉で表現することは苦手で、自分の思い通りにいかなかったり、相手に自分の意図が伝わらなかったりすると物にあたったり大きな音や声を出してしまう。また、答えが分かっていても授業中の発表場面では自分の考えを伝えたり、自分を表現したりすることを苦手としており、集団の中に入れないことも多々ある。本当は伝えたい思いがあるが、言葉での表現方法が分からなかったり、「うまくいかなかったらどうしよう」という不安がそこにあったりするように感じる。これらの実態から、自分の思いを相手に伝えられるような児童を育てるためには、どんな支援の在り方が大切かを明らかにすることを実践研究することとした。

3　主題設定の意味

（1）自分の思いを表現できる児童とは

特別支援学校学習指導要領解説　自立活動編　6コミュニケーション（1）コミュニケーションの基礎的能力に関することには、コミュニケーションとは、人間が意思や感情を相互に伝え合うことであり、その基礎能力として相手に伝えようとする内容を広げ、伝えるための手段を育んでいくことが大切であるとされている。自分の思いを表現することで自分の考えを整理できたり、相手に伝えることで相手との共通理解が深まったりするなど、自分の思いを表現することは社会生活を送る上でとても大切なことである。ここでは、児童の実態に応じて、絵や単語、言語による表現など様々な表現方法を手段として、相手に自分の思いを表現できる児童の姿ととらえる。

（2）自立活動の時間における指導とは

自立活動の指導は、個々の幼児児童生徒が自立を目指し、障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服しようとする取組を促す教育活動であり、個々の幼児児童生徒の障害の状態や特性及び心身の発達の段階等に即して指導を行うことが基本とされている。個々の幼児児童生徒の実態把握に基づき、自立を目指して設定される指導目標（ねらい）を達成するために学習指導要領等に示されている内容から必要項目を選び、それを相互に関連付けて設定されるものである。個々のねらいを明確にもち、その達成に向けて必要な支援を考えていくことは意義深いと考える。

4　研究の目標

自立活動の時間の中で児童が自分の思いを表現できるようにするために必要な支援の在り方を究明していく。

5　研究の仮説

自立活動の中で、次のような着眼で手立てを講じれば、児童が自分の思いを表現できるようになるであろう。

【着眼１】　題材設定の工夫

○　児童の興味・関心のあるものと授業内容を関連させ、学びに向かう意欲を引き出す。

【着眼２】　視覚情報の提示

○　写真やイラスト、文字カード、動画などを使いながら、伝えたい情報を視覚化（見える化）した上で整理して伝える。

【着眼３】　学びの場の工夫

○　クイズ形式、発表の場の持ち方などをその場に応じて変え、自ら表現する楽しさを感じられるようにする。

7　指導の実際

（１）実態把握

【資料１】

児童の実態に応じた授業づくりのイメージをつかむためサポートヒントシート追補版（福岡県教育センター）を活用し、支援の優先度を確かめた。Ａ児への効果的な支援の優先度については【資料１】のような結果となり、コミュニケーションにおいてサポートの必要性が高いことが分かった。日頃の学習や生活の様子を観察しても、コミュニケーション面での課題を多く感じていた。特に学習場面においては、自分の意見を発表する場になると発言できずに顔をうつぶせ、意思表示をすることができず、時には離席してしまうことも少なくないこと、Ａ児自身も人の前で発表することに抵抗を感じていることから、自立活動の中の６区分のうち、「３．人間関係の形成」「６．コミュニケーション」の２区分に重点をおいた支援を行うこととし、その中でも自分の思いを表現できるようにすることを重点課題として取り組むことにした。

（２）具体的な取組

①「紹介しよう　ぼくのこと」

ア　本時の主眼

自己紹介活動を通して自分のことを相手に伝えるとともに、お互いを理解し合い、より良い人間関係を築くことができる。

【自立活動区分】

３．人間関係の形成　　（１）他者とのかかわりの基礎に関すること

６．コミュニケーション（１）コミュニケーションの基礎的能力に関すること

（２）言語の受容と表出に関すること

イ　展開

学習活動	指導上の留意点　※評価
１始めのあいさつをする。	○気持ちが活動に向いているところを賞賛する。
２本時の学習の流れを確認する。	○本時の学習時間と活動内容を確認し、見通しをもって学習に向かえるようにする。
めあて　新しい学年になった自分のことを友だちにしょうかいしよう。	
２自己紹介クイズをする。 ・約束を確かめる。 ・自己紹介をする。	○話すときは「～です」、聞く時は「相手をみて」を意識して活動できるように約束カードを提示して確認する。 ○紹介項目カードを「はてなボックス」からひいてクイズ形式にし、出た項目から紹介していく。

	○ひいたカードは黒板に掲示し、紹介する内容が何かが常時分かるようにする。 ○紹介を行う児童の順番を意図的に指名し、発表の仕方のイメージをもたせるようにする。 ○話言葉で伝える他、文字カードを準備し、カードを用いても紹介できることを伝え、安心して表現できる場の雰囲気をつくる。 ○約束が守れている時は、適宜賞賛し認める。 ※紹介カードをもとに、自己紹介をすることができる。
３本時のまとめをする	○発表したことを自己紹介カードにはり、カードを完成させる。 ○発表できた様子を映像でみて、自己のがんばりを客観的に評価できるようにする。 ○自分で学習の振り返りを行い、がんばっていたこと、よかったことを伝える。
７終わりのあいさつをする。	○教師に注目してあいさつができるようにする。

【着眼１】題材設定の工夫

新しい学年に進級した４月、新たな学年になった自分のことを友だちに伝えたいという気持ちが強く感じられた。そこで、自己紹介をする学習を設定した。

どんな内容を友だちに紹介するか具体的なイメージをもたせるために、まずは項目を選択肢の中から選んで決めた。好きな教科、好きな食べ物、好きなキャラクターなど、Ａ児がイメージしやすく答えが明確で、これが好きだと自信をもってはっきりと紹介できると思われるものを項目の中に入れた。その項目の中から、Ａ児自身が自分で選ぶことで、伝えたいと思う意欲を高めることができた。Ａ児にとって課題が明確で、目標がはっきりもてることも有効であったと考える。

【着眼２】視覚情報の提示

紹介の時に話す時、聞く時の約束を確かめ提示した。話す時は「～です」をつける、聞く時は「相手の目をみて」と、内容は短く分かりやすくした。それを提示することで、紹介をする時に意識でき、守れた時は「できているね」と賞賛することができた。

また黒板には、その都度紹介する項目を提示した。【写真１】友だちが発言する時も今何について紹介しているかを確かめることができ、安心して活動することができていた。

【写真１】

振り返りの際、自己紹介ができていた自分の姿をＡ児が映像で見ながら振り返り、がんばりやできたことを認める言葉かけを行うことができた。

【着眼３】学びの場の工夫

事前に考えていた紹介項目を、児童が「？ボックス」からひき、クイズ形式で紹介することで楽しみながら表現したいという思いにつなげることができた。【写真２】相手意識をしっかりともち、友だちの好きなことを聞いた児童が「意外だなあ」と反応している場面もみられた。

【写真２】

また、文字カードを準備し、【写真３】話し言葉によるやりとりの他、文字カードによる表現方法も選べることを伝えておいた。結果的にこのカードは使うことはなく、話し言葉で相手に紹介することができたが、文字カードを準備していたことでうまく伝えられないかもという不安が軽減され、安心につながったと考える。

【写真３】

さらに、紹介する児童の順番を意図的に決めた。モデルとなる一つ年上の児童に先にお手本を示してもらうことで、発表の具体的イメージをもたせることができ、一つ年上の児童にも自信や意欲をもたせることにつながった。

②順番を考えて説明しよう「いっしょにつくって楽しもう　～ピザづくり～」

ア　本時の主眼

出来上がりの様子をもとに調理の手順を考えることを通して、自分が考えた手順を順序立てて伝えることができる。

【自立活動区分】

６．コミュニケーション（２）言語の受容と表出に関すること

（４）コミュニケーション手段の選択と活用に関すること

イ　展開

学習活動	指導上の留意点　※評価
１はじめのあいさつをする。	○気持ちが活動に向いているところを賞賛する。
２本時の学習の流れを確認する。	○本時の学習時間と活動内容を確認し、見通しをもって学習に向かえるようにする。 ○児童がお世話し育てた夏野菜を使って次時にピザづくりをすることを伝え、本時は作り方の順番を考える学習であることを伝える。
めあて　ピザをつくるじゅん番を考えよう。	
３作り方の順番を考える。	○学習活動を焦点化させるため、１２個ある工程の中から３つの工程に絞って順番を考えることとする。 ○考えを整理しやすいように、工程が分かる写真のついた付箋を並び替えられるワークシートを用いる。 ○出来上がりの写真を提示し、なぜその順番にした

	のか、根拠を説明できるようにする。
４自分の考えを発表する。	○話すときは「～です」、聞く時は「相手をみて」を意識して活動できるように約束カードを提示して確認する。 ○紹介を行う児童の順番を意図的に指名し、発表の仕方のイメージをもたせるようにする。 ○ワークシートを見せながら発表してよいことを伝え、自分の考えを安心して発表できる雰囲気をつくる。 ○約束が守れている時は、適宜賞賛し認める。 ※作り方の順番について、写真を手がかりにして説明することができる。
５本時のまとめをする	○本時で考えた手順で次回ピザづくりをし、順番が正しかったかどうかを確かめることを伝える。 ○振り返りをし、頑張ったところを発表する。 ○自分でがんばりを見つけられない時は、がんばっていたことよかったことをまわりの友だちや教師から伝え、振り返りをする。
４終わりのあいさつをする。	○教師に注目してあいさつができるようにする。

【着眼１】題材設定の工夫

自分たちがそれまでお世話して育てた夏野菜を使うという喜びと、それを使って調理をするという課題が明確で、学習に意欲的に取り組むことができ、笑顔がいっぱいの時間になった。

夏野菜を使ってつくるメニューは餃子の皮で作るピザ。１２個ある工程の中から、３つの工程をピックアップして順番を考えたことで、焦点化して活動に取り組むことができた。**【写真４】**

【写真４】

【着眼２】視覚情報の提示

出来上がりの写真をもとに、写真付きの付箋をワークシートの中で動かしながら考えをまとめ考えを表現することができた。なぜその順番にしたのかという問いに「先に小さく切らないとのせられないから」という理由も合わせて説明することができた。**【写真５】**

【写真５】

【着眼３】学びの場の工夫

一人学びの時間を大切にしたことで、自分の考えをまとめ表現することができた。

また次の時間に、実際に調理してみて答えを確かめるとしたことで、児童は答えを見つけたいという思いで順番やその理由を考えることができた。**【写真６】**

【写真６】

③スリーヒントクイズをしよう

ア　本時の主眼

問題を出したり、ヒントを聞いて答えたりする活動を通して、自分の考えを相手に伝えることができる。

【自立活動区分】

３．人間関係の形成　　（４）集団への参加の基礎に関すること

６．コミュニケーション（１）コミュニケーションの基礎的能力に関すること

（２）言語の受容と表出に関すること

イ　展開

学習活動	指導上の留意点　※評価
１はじめのあいさつをする。	○気持ちが活動に向いているところを賞賛する。
２本時の学習の流れを確認する。	○本時の学習時間と活動内容を確認し、見通しをもって学習に向かえるようにする。
めあて　ヒントをつくって、クイズ大会をしよう。	
３スリーヒントクイズについて知り、ヒントをつくる。 ・学習の大まかな進め方を確認する。 ・ヒントカードに３つのヒントを考えて書く。	○ヒントのつくり方や大まかな流れを動画で確かめ見通しをもてるようにする。 ○答えのカードをひいて、問題をつくる意欲をもたせる。 ○ヒントの手がかりとなるような視点を黒板に提示する。（色　形　大きさ　使い方等） ○書いて表現することへの抵抗感をなくすため、ワークシートをラミネートしたものにホワイトボードペンで書き、書いたり消したりが簡単にできるようにする。
４問題の出し方や答え方を知り、クイズを出し合う。	○クイズ大会でのやりとりの言葉をプレゼンテーションで提示し、具体的にどんな言葉でクイズ大会を進めていくのかイメージをもたせる。 ○プレゼンの中にでてきたやりとりのことばを黒板に提示し、それをみながら安心して発表ができるようにする。 ○話すときは「～です」、聞く時は「相手をみて」を意識して活動できるように、約束カードを提示して確認する。 ○クイズを出す児童の順番を意図的に指名し、発表の仕方のイメージをもたせるようにする。

	○話し言葉で伝える他、文字カード準備し、カードを用いてもやりとりができることを伝え、安心して表現できるようにする。 ※自分の考えた三つのヒントを友だちに伝えることができる。 ○約束が守れている時は、適宜賞賛し認める。
５本時のまとめをする	○振り返りをし、頑張ったところを発表する。 ○自分でがんばりを見つけられない時は、がんばっていたことよかったことをまわりの友だちや教師から伝え、振り返りをする。
６終わりのあいさつをする。	○教師に注目してあいさつができるようにする。

【着眼１】題材設定の工夫

児童の身近にある児童が好きなもの関心のあるものを答えにしたことで、友だちに問題を出したいという意欲をもたせることができた。しかし、本人がこだわりをもっている興味関心が非常に強いものを対象にすると、問題を出すことよりも対象そのものに興味関心がうつってしまうため、答えの対象については吟味して選ぶ必要があると感じた。

【着眼２】視覚情報の提示

大まかなスリーヒントクイズの仕方を動画で確認することで、見通しをもって活動することができた。さらにクイズを始める前には、児童が実際にヒントを出す時、答える時の言葉のやりとりをプレゼンで見て確認させることで、どんな言い方をしたらよいかの具体的イメージをもたせることができた。**【写真７】**その後、やりとりの話言葉を黒板に提示することで、それを見ながらクイズを出したり答えたりすることができた。

【写真７】

書いて表現することへの抵抗少なくするために、すぐに消せるラミネートしたワークシートにホワイトボード用のペンを使いすぐに書いたり消したりすることができるようにしたことで、離席せず楽しみながらヒントをかくことができた。**【写真８】**

ヒントを考える時の手がかりとなるような視点を黒板に提示したことで、その特徴を考えて分かりやすく説明できた。

（色　形　大きさ　使い方等）

【写真８】

【着眼３】学びの場の工夫

クイズ形式にすることで児童の学習への意欲がたいへん高まり、自分から進んで表現したり、関心をもって相手をみたり話を聞こうとしたりする姿がみられた。また、ヒントを考える間は、パーテーションで友だちとの空間を区切り、集中して取り組めるようにしたことで、クイズを出したいという意欲を高めることができた。

あらかじめ答えを用意したものからヒントを作成し、定型のやりとりを学習することで活動の見通しをもつことができ、さらには、自分で選んだものでクイズを出すことにつなげることができた。この学習の最後の時間まで集中して取り組むことができた。

【写真９】

話言葉で表現することに抵抗がある場合は、準備していたやりとりの言葉カードを相手にみせることで自分の思いを表現してもよいことを伝えた。A児は、言葉カードと話言葉とを組み合わせ、自分で表現方法を選択しながら友だちとのやりとりをスムーズに行うことができた。**【写真９】**自分の思いを優先しすぎたり、どう表現してよいか分からなかったりすることはなく、提示した話言葉以外の言葉でもやりとりする場面がみられた。離席することもなく、安心して活動に取り組むことができた。

8　研究のまとめ

児童の課題を明確にし、題材設定の工夫、視覚情報の提示、学びの場の工夫といった支援を行って自立活動の学習を行うことで、自分の思いを表出する児童の姿がみられた。このことから、題材設定の工夫、視覚情報の提示、学びの場の工夫といった支援を行うことは有効であったと考える。

今年度行った自立活動の学習の中で自分の思いを表現できたA児の姿をたくさん見ることができた。自分の思いを表出できた時のA児は笑顔で穏やかな表情をしていた。この小さな成功体験をたくさん積み重ねることが、将来の自立につながっていると考えている

9　成果と今後の課題

○　客観的な評価方法を用いての児童の実態把握や、児童の日頃の観察を丁寧に行うことで課題が明確になり、課題を焦点化して必要な支援を考えることができた。

○　児童の興味・関心のあることや今取り組んでいることを授業内容とつなぐことは、伝えたいやってみたいという意欲を高めることに有効であった。

○　伝える内容やその手順、具体的な言葉などを視覚情報として見える化することで、思いを表出する具体的な方法を理解できるとともに安心して学習できる環境づくりに有効であった。

○　クイズ形式にしたり、一人学びの際にパーテーションで空間を区切ったり、話言葉以外の表現方法を選択肢として選べるようにしたりするなど、学びの場の工夫を行うことは、活動に集中して取り組め、表現する楽しさを味わうことに有効であった。

●　めあてを達成できそうにない時は、その時に児童が選んだ活動を賞賛し、児童が納得した形で活動を終え、次回の学習への意欲につなぐことが大切である。

●　学習の中で自分が目標を達成できた姿を動画で見るなどして、自分のがんばりを客観的に評価できるような場の設定を行う。

◎　参考文献

○　新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議の報告（Ｒ３年１月）
○　障害のある子供の教育支援の手引（令和３年６月）文部科学省
○　特別支援学校教育要領・学習指導要領解説　自立活動編（Ｈ３０年３月）
○　サポートヒントシート追補版　福岡県教育センター